

白米千枚田

石川県能登半島の白米では、海岸へと下る斜面に、千を超える棚田が連なっています。「千枚田」(文字通り「千枚の田んぼ」)の棚田は、広さが50平方センチメートルから約18平方メートルで、すべて手作業で耕されます。この斜面では、江戸時代(1603～1867年)初期から米が栽培されてきました。訪れる人が田んぼを傷めることなく近づけるよう、田んぼの周りには小道が通っています。丘の上にある情報センターとお店では、伝統的な農業について学ぶことができ、田んぼで育てられたお米を買うことができます。

利用できる土地を最大化する

能登半島の気候は米作に向いていますが、農業に適した平地は不足しています。少なくとも江戸時代以降、この地域の農民たちは、生きていくために、狭い土地を耕すことと、それ以外の仕事(漁業や林業など)に時間を分けて使ってきました。棚田は、米の生産量を最大化し、土壌流出を防ぐ方法として発展しました。この田んぼは、水と堆積物を保持するダムとして機能するため、必要な肥料は平地の田んぼより少なくなります。

農業遺産を保存する

米作において、小型の収穫機や脱穀機といった機械は一般的になりましたが、白米の棚田の不規則な形と勾配は、土壌の準備・田植え・稲刈りを手作業で行う必要があることを意味します。このよ

うな実践が、能登半島での農業の伝統を保存しており、2011 年には世界農業遺産 (Globally Important Agricultural Heritage System, GIAHS) に指定されました。